平成20年度以降の接続料算定の在り方について

平成19年5月22日
フュージョン・コミュニケーションズ株式会社

１．新たなLRICモデルの評価について

長期増分費用モデル研究会において取りまとめられた新モデルを平成２０年度(2008)以降の接続料算定に用いることについてどのように考えるか。

現行の第三次モデルから、交換機ソフトウェアの耐用年数の見直し、データ系サービスとの設備共用の反映により、約３％程度のコスト削減結果を評価します。その採用に賛同します。

２． NTS（Non TrafficSensitive）コストの扱いについて

〇現行接続料算定においては、「今後想定される通信量の減少を踏まえ、接続　料が一定程度以上の値上げにならないように、少なくとも通話料の値上げに繋がる水準とならないようにし、かつ、NTT東日本及びNTT西日本の基本料収支に過度の影響を与えないためには、NTSコストを5年間で段階的に接続料原価から除き、これを基本料の費用に付替えることが適当」とした情報通信審議会答申に基づき、NTSコストは、平成21年度(2009)までの5年間で段階的に加入者交換機能の接続料原価から控除されている。

〇その後の接続料水準及び基本料収支の動向等を踏まえ、NTSコストの扱いについてどのように考えるか

平成17年度以降の接続料算定の在り方について情報通信審議会答申（平成16年10月19日） に基づき5 年間での控除を実施するべきと考えます。 接続事業者としては、NTSコストは従来から接続料コストから全額即控除すべきところを激変緩和を理由に、平成21年度（2009）まで先延ばしされたものと認識しています。

３． 接続料算定に用いる入力値の扱いについて

○ 現行接続料算定においては、通信量が比較的安定的に減少している状況に鑑み、8か月分の予測に基づく「前年度下期＋当年度上期の通年通信量」を用いるとともに、その他の入力値については毎年度更新している。

○ 近年の通信量の推移を踏まえ、接続料算定に用いる通信量についてどのように考えるか。

○ また、その他の入力値の扱いについてどのように考えるか。

現状の通信量の変動は縮小する傾向が見られる。従って、現行の8ヶ月分の予測方式でも大きな誤差は発生しないため問題ないと考えます。
尚、当該年度の通信量を使うことは理想ですが、その場合は、煩雑な遡及精算が必要となるため、これをする効果は小さいと考えます。

その他の入力値についても今回のモデル値で問題ありません。

FUSION COMMUNICATIONS

４．接続料における東西格差の扱いについて

○ 現行接続料算定においては、現行のLRICモデルによりNTT東西の接続料をそれぞれ算定した場合、東西間で20%を超える格差が生じることを踏まえ、引き続き、接続料を東西均一にしている。

○ 新モデルによる東西格差や競争環境の変化を踏まえ、接続料における東西格差についてどのように考えるか。

↓

NTT東西別の料金は、実際費用方式での各機能料・工事費・手続き費等として運用されています。従ってこの網利用料のみを東西均一とする必要性はないと考えます。

５．新モデルの適用期間について

現行のLRICモデルの適用期間については、見直しに必要な期間及び競争環境の変化を踏まえ3年間としているが、新モデルの適用期間についてどのように考えるか。

平成２２年度(2010)までの３年間が適当と考えます。
今後のマイルストーンとして、NTT東西殿の光ｻｰﾋﾞｽ3000万利用、次世代ﾌﾞﾛｰﾄﾞﾊﾞﾝﾄﾞ戦略2010におけるﾌﾞﾛｰﾄﾞﾊﾞﾝﾄﾞｶﾊﾞｰ率100%が、同年を目標としていること等を勘案しました。

６．新モデル適用期間後における接続料算定の在り方について

新モデル適用期間後の接続料算定の在り方に係る基本的な方向性についてどのように考えるか。

IP網への移行状況を考慮したモデルとする必要があると考えますが、現時点でのIP網は、発展途上にあり今後の技術革新によりネットワークも進化するため、モデルとして固定することは困難です。
今回の第4次モデルの適用期間中における課題と考えます。